工風にて、原紙にて手づからたぼの形に作り、墨もて塗り用ひしに、髪結よかりしとて（今とは少し異なる）此部屋方にて、婢女多く用ひしに、作り樣粗なる故、損じやすきをいとひ、常に出入する小間物屋、神田明神下に住める兵藏と云ふ者に、かやうの物をとて、其たぼさしをあたへて作らせよとて、誂ひしより世に流行せしとぞ、（○中略）後々に至りては、世上一統の用具となり、今猶殘れり、

京山按ずるに、寛政年間、翁の隨筆賤のをだまき（寫本）といふ物に、（○中略）鯨にて作りたる物なりとありて、圖をいだしたる傍註に、此物今すたれて誰ぞる者なしとあり、其後小林歌城翁（御旗本隱居）鯨にて作りたるたぼさしの、いと古きをおこされて、時代の考證を尋ねられしに、かのをだ卷にのせたる圖と同じ物なり、凵形圖の如く總長六寸、左右の張出し四寸なり、をだ卷にある延享の物に定むるよしは、此頃の女のたぼ先、かもめづと丶名づけ、たぼのさがり、襟に至る程なり、右の圖のたぼさしの丈の長を以て、延享の物と定むべし、をだ卷に、此物今すたれて誰知る人もなしとあれば、近來のたぼさしは、天野翁の說の如く、婢女の作り始めしは、古今の闇合にて、いとめづらしき說なるかし、

〔歷世女裝考四〕たぼさしの起立

今より四十年ばかり以前に、たぼさしといふ物いできて、市婦等おほかたは、是を用ひて重寶とし、追々輕便つくりかたのものありて、今もすたらず、はじめていできし時は、珍しと人々いひけるが、（○中略）賤のをだ卷（寫本）をみれば、たぼさしは近古ありける物なり、をだまきに（○中略）圖を出し、傍註に此物今すたれて、誰ぞりたる人もなしとありて、ちひさく圖をいだしたるに、寸法をぞるさず、ゆゑに大小辨じがたかりしに、一日或貴人よりおほせに、是は昔のたぼさしなるよし、時代の考證あらば記してよとありしが、をだ卷のづにたがはざれば、うつしとゞめし圖左のごとし、